講演論文

激動する世界と日本文化

服部 英二

ただいま廣池幹堂理事長、岩佐信道道徳科学研究センター長からお話がありましたように、当研究所は急速に国際化に向かっております。それは当然のことでありまして、日本は世界の中にあるのです。その世界といかに対話していくのか、われわれは果たして発信すべきメッセージを持っているのかどうか、われわれすべてが深く問わなければならないことであります。そこで今日は、後で皇室の専門家でおられる所功先生がいらっしゃいますので、その本題に入ります前に、世界の現状の中での日本の立場というもの、そして日本の文化というものが、もし存在意義を持つならば、それはどのようなものかと、いわば導入部を、私はつとめてみたいと思っているわけであります。

ご存知のように、現在世界は激動の中にある。そして政治的、経済的な激動と共に、地球環境が、あるいはごく近い将来、破壊されるのではないか。すでにその環境破壊という面が、日夜報道されるようになってきております。私が申し上げたいのは、この二つの問題は、同根である。同じことの二つの表れであるということであります。

そこで、現在の金融危機ならびに経済危機。日本もそれを被りまして、いろんな問題が起こってお

ります。景気は沈滞し、非常に苦しい生活を余儀なくされている人々が増えました。しかしながら、私はこういった問題は、経済的あるいは金融の危機というような危機ではなく、もっと大きな、地球文明の危機というふうにとらえるわけであります。世界の現状を見ますと、まず中近東に起こっていることがあります。あの九・一一事件、イラク侵攻、それからアフガニスタンへのアメリカのさらに三万名に及ぶ増兵。果てしないタリバーンとの戦い。つまり、出口の見えない戦争に、今、世界は突入している。これは二つの聖戦なのか。両方が、これは聖戦だと言っているのですね。一方は、テロとの戦いという、この論理はもちろん聖戦の論理であります。自由と民主主義を守るためのテロとの戦い。それから、もう一方のアルカイダ、あるいはタリバーンが使っている論理はジハード、やはり聖戦であります。すなわち、二つの聖戦がぶつかっているという、こういう形になっておりますが、二つともいうなれば一つのテロの形を取っている。一方は群集に紛れ、飛行機をのっとり、姿を見せないやり方。一方は完全に政府と軍隊が姿を見せるやり方。双方とも、この聖戦という大義名分を掲げるかぎり、テロの行為に走っていると見ることができます。

それからもう一つの大きな問題は、この地球資源の収奪、あるいは簒奪という問題であります。これが現在の地球環境の破壊を招いているわけでありますが、そこにありますものは、市場原理主義です。マーケットプレイスと言いますけれども、市場、自由市場というものを拡大していくという、欧米発の理論であり、世界はそれに従っております。これは市場原理主義と呼ばれ、これまた原理主義になっております。したがって、今宗教の名で戦っているものを原理主義と言えば、今度は経済面での原理主義というものが出現している。それがまた、アメリカが発明したことでありますけれども、金融工学というものまでも生み出した。金融工学と言うのは、まさしく数字の操作でありますけれども、それが電子マネーという形で、あらゆるものを食い尽くしていくのですね。現在、地表を行き交っているものは、札束にも何にもならないのです。電子ですから、バーチャルなんですね。コンピュ

ーターで飛び交っているお金というのは、毎日一兆ドル以上であります。一兆ドルが毎日、この地表を飛び交っている。このしくみをつくり出した経済学者がノーベル賞をもらうという結果になっております。そこで貧富、格差というものはさらに広がりまして、世界中に貧困が拡大している。日本でももちろん貧困の問題が大きく取り上げられておりますけれども、この金融工学を発明し、市場原理主義の旗手となっておりますアメリカでは、これはあの映画監督のマイケル・ムーア氏が言っておりますけれども、一パーセントの人が、下位の九五パーセントの人が持つ富よりも多くの富を持っているという社会が出現した。こういう構図が、世界的に広がっているのです。

一方、新興国と言われるものがあります。これまた、テレビや新聞をにぎわしているものでありますけれども、近年の中国、インドの成長は著しい。しかし、それならばこれが全ていいことなのか。例えば日本経済でも中国経済の進展に誘われて、多少助かっている面があるという人がいますが、これが全ていいことなのかという問題があります。一つは急成長を遂げているアジアの国々。これは日本を約五十年遅れで追いかけているという形を取っているのでありますけれども、そこに見られるのが著しい精神性の欠如です。現在、中国に参りますと、仏教はおろか、儒教も道教も感じられません。そこにあるのは唯一拝金主義であります。中国人は、かつて儒教、仏教を持っておりましたね。それはもはやありません。それに代わって、宗教のように拝金主義がのさばっている。それが現在中国が導入した資本主義と非常にマッチしまして、この急成長を遂げているのでありますけれども、政治と経済体制の矛盾は明らかであります。本来、資本主義と言いますものは、民主主義を地盤としなければなりません。だいたい欧米の民主主義の成立と同時に起こっているものです。それなのに、一方では一党独裁という形を続けている。これは完全な矛盾でありますから、いつか破綻が来るということも予見されるわけであります。

そこで、現在の世界を見ますと、指導者なき世界ということが言える。パクスアメリカーナという

のは、アメリカの平和です。かつて一時期、Pax Romana（パクスロマーナ）ということが言われました。ローマが、ヨーロッパ、地中海、インドまで平定した時期がありました。そのローマの平和ですね。その言い方をまねて、現在アメリカの平和といわれます。アメリカが、一種の平和を地上にもたらしているという考え方ですね。これは終わりに近づいておりますが、実はこれは悪いことではない。オバマ大統領が単独行動主義のブッシュ政権から代わって、国際社会との協調ということを言い出したことは、非常にいいことなのです。いいことでありますが、それと当時に経済力を失ったアメリカが、いまや完全な指導力を失ったということも、また事実であります。すなわち世界は一極から多極へと移っている。一極的な支配関係が多極化しているわけですね。そうですが、多極化という場合、それをまとめるものがなければいけない。ところが世界国家というものはありません。国連もまた、世界国家ではありません。G8というものがあるではないかと言われますが、G8はもはや三十数年過ぎまして、老朽化いたしました。これにかつてのインパクトはありません。そこで最近、新興国、経済的な大国を入れまして、G20というグループができました。しかしこれもいまだ未熟で、大きな力を発揮するに至っておりません。

全体的に世界を見ますと、グローバリゼーションというものが進んでおりまして、これは何を意味するかというと、十八世紀の後半から生まれてきました民族国家、nation states（ネーションステイツ）という概念が、実は解消に向かっている。そういうふうにも言えるわけであります。つまり、多国籍企業というものは、現在どの国によるということを言わない。すべての国に資本家がおり、仮にその本社はどこかにあっても、すでにどこの国の企業とはいえない状況。こういう多国籍企業が世界を支配しつつあるということであります。私がなぜ人類文明の危機というのかと言いますのは、価値の単一化。この多国籍企業が、電子マネーと市場原理によって世界を支配するというこの状況が、文明の危機を招いているからであります。

ここに、皆さんも新聞やテレビでご覧になったかと思って、あるいはそういう映画もありましたから、二〇一二年という名前を出しましたけれども、これはマヤ暦による予言の年でありまして、マヤ暦を判読していきますと、西暦に置き換えたとき、二〇一二年に終末のときが来るということですね。この読み方なんですが、実はマヤ文明を研究している人は、そのようには読まないんですね。なぜならば、マヤ暦というのは二つの暦が歯車のようにかみ合っておりまして、ハーブ暦というのとツォルキン暦というのがありまして、一方は宗教の暦、もう一方は太陽暦なんですけれども、これがかみ合って動いていく。五十二年というのが、日本で言いますと還暦なんです。すなわち元へ戻る年なんです。五十二年ごとにマヤの歴史はリセットされる。そして新しいものが生まれていくという考え方です。二〇一二年と言うのは、マヤ暦の起源から数えて五千二百年目に当たるのです。つまり、五十二の百倍なのです。百回目のリセットなのです。そこに大きなリセットがあると、そういう一つの予言です。そこで、これを「二〇一二年」という映画で描いているような、天災による地球滅亡の年というのではなく、われわれの生き方をリセットする時と、そういうふうに考えればいいのではないか。このままで行きますと、完全に環境は破壊されますから、このマヤが予言した二〇一二年を、われわれの価値観のリセットの時にしなければいけない。それは端的に言いますと、市場原理からの脱却です。それをこれから、今年から二年間に行わなければいけない。それを果して行えるのかという問いであります。

それで、これからの生き様なんですが、多様性こそが人類の世界遺産という哲学です。これが理解されなければいけない。これは廣池理事長がよく言われる「互敬の世紀」となるべき、ということなんですね。互敬というのは、すべての文化、すべての文明を敬う。それに関する重要な宣言は、二〇〇一年に出ております。これはユネスコ総会で採択された「文化の多様性に関する世界宣言」です。この第一条を抜書きしておきましたけれども、ここに非常に重要なことが書いてありますね。「自然

界に生物多様性が不可欠なのと同様、人間の生存には文化の多様性が不可欠である」。これは、実は東京で行われました一九九五年のシンポジウムでの、ジャック・イヴ・クストー（Jacques-Yves Cousteau, 1910-1997）の証言に基づいているわけです。これもやはりユネスコシンポジウムが生み出した結論なのです。文化の多様性というものと、生物多様性が、同じように動いている。そしてさらにこれが単に類似じゃない、これは有機的に結ばれているということを、去年亡くなった偉大な文化人類学者、レヴィ・ストロース（Claude Lévi-Strauss, 1908-2009）が証言しております。

そこでこういうことを考えますと、文明の概念というものに曲解があったのではないかということになるわけです。すなわち、近代文明というものは、人の歴史と言いますと、ここに人と書きましたけれども、これは東アフリカに人類の祖先が現れたときからを指します。原人の前の猿人。そこから数えましたら約六百万年と考えられますから、近代史三百年の歴史というのは、その長い長い人類史から言いますと、二万分の一の時間なんです。その間に非常な異常事態、おかしな事態が起こったのではないかということなのです。そして、これを引き起こしたのが十七世紀の科学革命であるわけです。伊東俊太郎先生が、皆さんもよくご存知の五大革命説というのを唱えられて、人間は人類革命、農業革命、都市革命、精神革命、科学革命という五つの革命を経験してきたとおっしゃっていますね。その中で思い起こしていただきたいのですけれども、最初の四つの革命は世界各地で同時多発的に起こっているのです。それに対して科学革命だけは、ヨーロッパという一地域だけに起こっている。なぜか、ということです。それを私は吟味したいと思うのです。その他の革命は同時多発的に起こった。たとえば精神革命の時代というものは、ドイツの哲学者カール・ヤスパース（Karl Jaspers, 1883-1969）が指摘したアクセンツァイト、「枢軸の時代」というのと合致しているわけですね。廣池千九郎先生もまた、同じところに着目して、その精神革命の時代の精神的な指導者を扱っておられる。ところが十七世紀の科学革命は、なぜ同時多発的に起こらなかったのでしょうか、例えばアジア

で……。なぜならば、中国はそのとき最先進国でありました。インドだって進んでいたのです。ところが科学革命は、そこで起こらなかった。ヨーロッパで起こった。この原因を、私は十六世紀以来のヨーロッパ特有の宗教と自然科学の戦いにあったと見るのです。そこに熾烈な戦いがあった。これは実はルネッサンス以来起こっていたのです。ルネッサンスというのは、中世のキリスト教のヨーロッパによるギリシャの再発見、これは正しいのです。それにはアラビア、イスラーム文明の貢献ということがありましたけれども、それを省略してギリシャの科学を再発見すると言うのですが、そのギリシャとキリスト教とは、全然別物です。それを再発見することによって、キリスト教の教理は、すでに矛盾に立たされていた。あくまで理性を中心にするギリシャ的手法が、自然科学を生み出すわけです。その文明的矛盾の時代、それは十五世紀からすでに始まりますけれども、十六世紀、そして十七世紀に至るまで、ヨーロッパは二重真理説というもので切りぬけて行くわけです。しかし、ついに自然科学が勝つ。この熾烈な戦いが、一種の発射台のように、ヨーロッパという一地域を発進させ、また、科学革命を生じさせた原因であると、私は考えるに至ったわけであります。

そこで、そういった科学革命を経てでき上がってきた近代文明というものは何であるかと言いますと、理性至上主義、啓蒙主義です。先ほどちょっと触れました、ギリシャの理性というものが、至高の価値として置かれたわけですね。したがって、人間のほかの能力というものは下位に置かれる。人間は理性的動物でありますが、理性だけで生きているのではない。理性、感性、それからもう少し深いところに霊性というものがあります。理性、感性、霊性の三つが渾然一体となって生きているのが人間存在です。ところが啓蒙主義の時代には、その中の理性だけをトップに持ってきますから、その他の能力を軽視します。それが自然科学を発達させはしますけれども、ほかの弊害を生んできた。つまり啓蒙主義というのは別の言葉で言いますと、男性主義です。男性原理に立ったやり方なんですね。それから自然を客体化します。自然というものは人間という主体の外にある客体とされる。だか

らそれを征服してよろしい。それを所有してよろしいという対象になります。その科学が持っていた立場、これが本質なんですが、Value Free（バリューフリー）、「価値を問わず」です。善悪を問わないということです。これが科学の基本的な態度です。これを指摘されたときに、私はほんとうに愕然としたのを覚えています。今から約二十年ぐらい前、これはクストーさんに教えてもらったのですが。“Science is value free.”（サイエンス・イズ・バリューフリー）。サイエンスというのは価値を問うものではない、と。これが結局は、大量破壊兵器に行き着く科学の本質であります。人のモノ化、質の数量化、自然の簒奪、かけがえのない地球の破壊、こういうものに、全部が結びついていく、ここにいびつな人間像があります。これを私は物質的な進歩、しかし精神の砂漠化、そういうふうに申し上げたいわけであります。

ところがそういった西洋発の近代文明が、唯一の文明であると、そういうふうに言われた時代が長く続くわけであります。これが幕末の日本に姿を見せた西洋でありますけれども、黒船の姿に、驚愕して日本も開国いたしますね。『坂の上の雲』の世界でもありますけれども、この時、西洋というのは、イーコール文明に見えました。それこそが文明に見えたから、文明開化ということを、脱亜入欧ということを叫びました。日本の魂だけはとっておかなくてはいけないということが、和魂洋才という言葉になっております。司馬遼太郎の『坂の上の雲』のような本が描いているのは、西欧列強に並ぶ試みであります。だからこの時の文明は、civilizations（シビリゼーションズ）ではなく、The Civilization（ザ・シビリゼーション）ですね、単数です。そちらのほうへ向かおうとした試み。これは日本も経験いたしたわけであります。しかしながら、その文明の実態というのは、実は、ほんとうの西洋ではなかったと、このことを私は申し上げたい。西欧という世界は、日本よりも古い歴史を持っているわけです。ギリシャ以前、エーゲ海文明、フェニキアの文明、すべて西欧です。長い長い文明の歴史を経て、そこにキリスト教が入ってきて、中世まで行きます。この長い文明、その中には

ケルト文明もありました。そういった長い歴史を持った西洋には、やはり文化伝統というものがあったのですが、これが転換するわけです。先ほどの男性原理への転換を行う。そして、理性至上主義を打ち出すというのは、実は十八世紀なのです。このときに生まれた実態を変えた西欧と日本は出会った。しかしそれが本来の西欧だと思い込んだということであります。

この変身。これは実は非常に短い時間で、先ほど近代文明の時代というのは、人類史から見ると二万分の一といいましたが、そのまた半分以下ですね。結局、日本が開国しました十九世紀の中ごろを考えますと、その前のたかが五、六十年前に変身しているんですよ、ヨーロッパは。それがずーっと長く、そのようなすばらしい大文明があったかのごとく姿を現した。それが日本を驚愕させたのですね。これは松本健一さんであったか、書いていましたけれども、ペリーが四隻の黒船を率いてやってくる。日本人は上を下への大騒ぎ。あんな巨大な黒船が四隻「も」、と言ったというのですね。

ところがペリーはそのとき、四隻「しか」集まらなかったと言っているのですね。四隻しか集まらなかった。そのぐらい急ごしらえな西洋が現れたのですよ。文明開化を描く、この『坂の上の雲』の物語なのですけど、実際はこうだったのですね。しかしながら、物質文明、力の文明というのは強いです。目に見えるものですから。しかも、確かに医療や交通、通信というような分野で、大きな福祉を人類にもたらしたということがあります。それを認めなければいけませんね。したがって、それにすべての人が引き寄せられたのです。

しかしながら、私が注意を引きたいのは、そのとき人間の関心は「存在」から「所有」に移っているということなのです。つまり人間存在、私自身の存在ではなしに、私が何を持っているか。所有のほうに移っている。それにすべての人の関心が移っているのですね。Être（エートル・存在）というのはフランス語ですが、英語で書くとto beとなり、うまい単語がありません。フランス語でエートルに対するAvoir（アボアール・所有）という方がすっきりしています。もう一つ面白い偶然を付け

加えておきますと、このAvoirという語にみえるa（ア）という奪格ですね、つまりインド・ヨーロッパ語族に共通する否定詞です。voir（ボアール）とは見るということです。aがついて、見えないということですよ。ここがおもしろいですね。これは言葉が偶然そうなっているのですけれども、私はそれに気がついたのです、学生のころに。アボアールというものが増えていくと、ア・ボアール、見えない。物が見えないということになっていくんじゃないか。それが先ほど申し上げていた精神の砂漠化というものに通じるということですね。

そこで、その唯一と思われた文明ですが、ここに「普遍」という概念があります。しかし私は、これがほんとうに使っていい言葉かどうかに疑問を持っているわけです。何となれば、ユニバーサル（universal）という言葉は、ユニ（uni）、つまり「一つに」という意味、ベルソ（verso）とはラテン語で「向かう」という意味なんですね。一つに向かっていくということなんです。その「一つに」が前提にされていることが問題なんです。つまりそれは理性的、西洋的、男性的なものなのです。例えばカトリックと言います。私もカトリックの教えの中にいたものですから申し上げますけれども、カトリックという言葉自身がユニバーサルという意味なのです。普遍的な教会です。したがって公教会、公の教会なんです。カトリックの、私が尊敬しておりますヨハネパウロ二世、前の法皇ですが、いろいろな宗教と対話しました。すばらしいですね、宗教間の対話だから。しかしですよ、その対話は、究極的にはバチカンのほうへ来なければいけないんですね。自分が変わっていくのではなく、皆が私のところへ来てくださいという結果になるわけです。それがユニバーサルの問題点です。

普遍という言葉は、こうして非常に西洋的なものであると同時に、これがまた上下関係を生み出したということも注意しなければいけない。つまり、ユニバーサルというものが上位なんですね。それに対して特殊なものは下位に置かれる。それが他の非西洋文明というものが非常な不利に立たされた理由であります。それがまた差別の対象になっていく。この差別の対象になる、というところは、実

は「理性的」に関係しているのです。まずきらびやかなヨーロッパの文化を知っておられる皆さんは、向こうでは女性はすばらしい地位にあるのではないかと思われるでしょう。しかしヨーロッパの女性たちは、日本の女性だけの平等な立場を持っておりませんですよ。フランスのような一番進んでいるような国で、女性が参政権を得たのは、一九四六年です。男性が子供を国外に連れ出すときには、何の問題もありません。国境を越えて。しかし、奥さんのほうが同じく子供を車に乗せて国境を越えようとしたら、父親の承認書が必要でしたよ、国境で。そのぐらいの差別がありました。女性というものはなぜ差別の対象となったのかと言いますと、完全に理性オンリーで動けないからですね。女性においては理性と感性が交信している。それが差別の対象になるのです。子供はどうか。まだ理性が完全に使えないから差別する。やっとこの戦後、国連で世界子供の権利憲章が出来、そのときに初めて子供の権利というものが保障されるのです。それから同様に、非西欧民族という、西欧以外のすべての民族が差別の対象になりました。実はこれは、顔かたち、皮膚の色というようなことではないのです。完全に理性的に独立した人間ではなかったからです。その彼らは、インドでもアフリカでもアジアでも、理性、感性、霊性というのを渾然一体と生きていたからなのです。だから彼らは野蛮人だといって差別された。それが、そういう野蛮人を文明化するという名の正当性を与えた。それが植民地主義となっていくということであります。

そこで最近現れてきた新しい考え方ですが、これはトランスバーサル（transeversal）という言い方、先ほどのユニバーサルではなく、トランスバーサルという、「通底」という考え方をご紹介したいのです。これは反理性主義ではないのです。むしろ新しい理性主義です。今まで軽んじられていた感性、霊性とひびきあう理性であります。つまりこれこそが、全人性的なアプローチ、ホリスティックなアプローチです。この立場に立ちますと、かつてザ・シビリゼーションと言っていたあの時代から、野蛮人と見られていた世界の各地に文明があるということが認められるのです。その違いを尊重

していこうという立場になります。これを『論語』の言葉を引き合いに出して言いますと、普遍というのはユニバーサル、つまり一つに向かうという意味が根底にあるから、「同じて和せず」、になります。それに対して通底は「和して同ぜず」。こちらが君子の立場です。「同じて和せず」は小人の立場です。この立場から見ていきますと、万有相関という宇宙の実像が見えてくる。インターコネクテッドネス（interconnectedness）。これは岩佐さんが、先ほど紹介された国際会議でも議論された点ですね。通底の文化論の帰結であります。森羅万象は相互につながっているという認識が可能になります。これは廣池千九郎先生が『論文』の冒頭に書かれていること、その宇宙認識であります。万物に相互依存の法則があるのだということです。それは物質の文明論ではなくて、生命の文明論のほうへ行くものです。

このことをすでに科学的に証明した会議がありました。これは一九九五年にユネスコ五十周年記念として、東京の国連大学で開かれたものでありますが、そのシンポジウムです。「科学と文化、未来への共通の道」というシンポジウムでありますが、「東京からのメッセージ」という大切なコミュニケがあります。実は麗澤大学出版会のほうから、この記録が全訳で出ています。これも道徳科学研究センターの皆さんが手分けして訳したものです。この中に驚くべき表現があります。これは参加者であるアメリカの量子物理学者が書いた言葉なのですが、「全体は部分に包含され、部分は全体に行き渡っている」。すごいですね、この存在論は。これを私は、「全は個に、個は全に遍照する」と訳したわけです。それは「一即多、多即一」という禅の教えにもつながりますし、同じことですが、華厳経の言い方で言う、「一切即一、一即一切」。かつての西欧の理性の世界では矛盾に見えた「即の論理」を可能にする論理が生まれるわけです。ところが、これだけに限られずに、イスラムに行きますとタウヒードという言葉がありまして、それは政教一致、あるいは政教不二――それに対して政教を分離しているのがフランスなんかのやり方なのですが――と訳されるわけですね。そのタウヒードという

言葉なのですが、ほんとうのタウヒードの存在論的な意味は、神が万有に顕現しているという意味なのです。ですからこの華厳経とも結んでくるし、皆さんがご存知の、ウパニシャッドの有名な「梵我一如」にも通じる。すべて世界の古代の知恵というものは、結ばれてくる。こういうものを追究するために、道徳科学研究センターは、その主導者となりまして、パリのユネスコ本部で、ユネスコと共催の形で「文化の多様性と通底の価値」というシンポジウムを開きました。これに対しても報告書があります。さらに、二〇〇七年に国連大学で、「文化の多様性への新しい賭け」、あるいは挑戦と、こういうふうに訳されるシンポジウムを開きました。このときもユネスコと国連大学と共催という形でやっております。

そこで今の地球の現状を見るとき、文化、文明というものが、唯一、西洋型、男性型、理性的、科学的な文明だけではない、ほかの形の文明もあるというふうに考えていきますと、今、地球を救うものとして浮上してくるのが、日本もその一員として共有している、東アジアの豊饒の三日月地帯の生命観です。つまり日本から韓国、海洋中国、それからインドシナ半島のすべての国から、インドネシアまでも含む、大きな三日月地帯に存在する価値観がある。「母性原理」ですね。これは大自然の中に、一つの大きな、おおいなる命の循環を見る宇宙観ですね。森、山、川、海、その中に水が循環している。川となり海となり蒸気となり雲となり雨となる。この中に大きな命の循環を見る。この見方が、実は日本のみならず、西太平洋の、海のアジアと言ってもいい、その一帯には遍在しているわけです。このことに私は注意したい。これは完全に、新しい命の文明論と言えるものですね。そこでは時もまた円相を描く。そこにあるのは母性原理です。鶴見和子さんの言葉をご紹介しますが、母性原理とは、命の継承を究極の価値とすることです。そういう生き方があるのです。したがって、われわれのめざしている新しい理性主義と言いますものは、通底の理性主義というものです。それは理性を失わず、理性、感性、霊性のバランスを重視します。このバランスと言うことが非常に重要なので

す。これは結局先ほどの「和」ということにも関連してくる言葉です。ハーモニーでもあるのですね。そこで、その見地で世界に見てみましょう。かつて世界各地に存在した、「アニマへの志向」というものがあるということに、私は注意したい。アニマというのは霊魂なのです。いのちであり、霊魂です。それを実は、すべての文明、すべての文化が志向しているということは、パリ・シンポジウムで、チュニジアのファンタール教授が指摘して、全員が賛成したことです。そこでわれわれが求めているのは、科学革命で失われた全人的人間像の回復であるのです。これをちょっと聖書の世界に当てはめてみましょう。皆さんもご存知の創世記に、エデンの園の物語がある。そこで人類はヘビにそそのかされて知恵の実を食べた。そこから人類の堕落、原罪が始まるということになっていますね。しかしそのために、人間は神のようになって、世界を制覇していくわけです。神と等しくなる。これはヘビが言ったところです。これを食べたら神と等しくなると言ったのです、ヘビは。それでイヴのほうがその実を取るんですね、それで食べて、アダムに渡して、アダムも食べると。こういうことになっているんですけれども、ヘビは嘘を言っていなかったということに気が付きました。ヘビにだまされたと皆思っているんじゃないですか。しかしヘビはほんとうのことを言ったのですね。それを食べたものだから、ほんとうに神になってしまったのです、人間は。自分が神であるかのごとくに動き出したわけです。もう一つ、多くの皆さんが気が付いていないことは、エデンの園の描写に出てくるのは、実は一本の樹じゃないということなのです。二本あるんですよ、樹が。二本あって、一つが知恵の実をつけた知恵の樹。もう一つが生命の樹です。旧約の創世記を読み返してください。二本の樹があったのです。その知恵の実を食った物語が余りにも拡大化されて、人間が神と等しくなっていくことによって忘れ去られたもの、それは生命の樹の伝統なのです。生命の樹のほうを忘れていくのが人類史ではなかったかということであります。

そこで、力の文明から生命の文明へということを、私は言いたいのです。これは言いなおせば、物

から心へということなんでありますが、日本人が今発信すべきメッセージです。アインシュタイン(Albert Einstein, 1879–1953) の言葉を引いておきます。アインシュタインは、「日本は急速にヨーロッパの科学技術を吸収してわがものとした」と、最初に言いまして、しかし私の願いは、と続けます。「日本人が、西洋の先を行く、みずからの偉大な価値観を、そのまま持続し続けてほしいということだ」と。「その価値観とは、美的感覚に恵まれた生活の仕方、必要とするものの簡素さと倹しさ、心の安らかさである」。これはアインシュタインが、一九二二年に訪日したときに言い残した言葉であります。それからもう一つの言葉を引いておきます。今度は一九六七年。伊勢の神宮を訪れたアーノルド・トインビー (Arnold Toynbee, 1889–1925)、『歴史の研究』を書いたイギリスの偉大な歴史家ですが、伊勢神宮の境内に立ったときに書き残しております。英文のほうを私も見ました。「この聖なる地に立つとき、私はすべての宗教の底に横たわる一なるものを感じる」。まさしく通底するものです。このトインビーの感想をご紹介しておきたいのです。これが私から所先生の講演に移る懸け橋です。

そこで、日本のこれからですが、軍備は放棄しました。経済大国だと言っていますが、それだけではなく、ほんとうの日本の力は文化力です。それを発信するんです。トインビーが感じたようなもの、アインシュタインが感じたもの、それからまだ今日は書かなかったんですが、ポール・クローデル (Paul Claudel, 1868–1955) も言っているのです。日本の終戦のときに。敗戦によって素晴らしいこの文化がなくなってはいけないということを言っているのです。この文化の底にあるものは、ハーモニーに満ちた女性原理。母性原理であり、命の文明なのです。これが発信すべきもので、現在必要とされているものなのです。金融工学や市場原理、先ほど言ったすべてのもので荒れ果てている、人間の精神の砂漠化を食い止める、それが日本の貢献なのではないかと、そのように思うのです。

そこで、最後にここに書いておかなかったことを書きます。世界にはいろいろな文明がありまし

て、異なっているということなのですが、それをお互いに認めて、そこに通底するものを探ろうということの意味を、もっと具体的にわかるように書きます。廣池先生も取り上げられたものが文化伝統としてありますね。まずギリシャ、ソクラテスという人が象徴的に出てきますけれども、その文明。それからキリスト教、孔子、仏陀。こういうふうに見る。実はこの精神革命の時代というのは、ヤスパースの言う枢軸の時代なのですけれども、紀元前六世紀から約四世紀という期間なのですが、安田喜憲先生に言わせると、その前に気候変動があったと言います。人間の生活が非常に厳しくなった。それで急に、精神的な指導者が各地に現れる。それは非常におもしろい指摘です。しかし、それとは別にこういうことがあります。この四人とも男性であるのみならず、その説き方はかなり男性原理的です。ところが、この同じ地域にこの前に存在していたものがある。同じところに、精神革命の前に存在していたもの、エーゲ文明、ケルト文明、そういうところまでさかのぼっていきますと、エジプト文明まで行きますね。これは女性原理なんです。すべてのところで大地母神、女神を敬っている。ところが、わが日本と東アジアのほうでは、ここにあった根底的なものが、そのままつながってきている。もちろん欧米の文明のおかげで、われわれ自身も相当失ってますよ、その心を。だからこそ、所先生のような方に来ていただかなくてはいけないのですけれども。われわれも洋服を着ていますしね、机に座ってますから、それは否定できないのです。しかし根底的には、われわれは母性原理の精神を持っている。これを見直すということですね。男性原理、力の文明が出現する前にあったものは、まさしく世界的に通底しているのです。これがヨーロッパでは、磔刑のキリストよりも聖母を愛するという、聖母信仰という形で現れるのですね。今、全部が帰ってきている。ちょうど廣池先生が書かれた順番と一致するのですけれども、この四人の聖人のことを書かれて、それから後にもう一つ、日本の伝統を書かれるのですね。文明の深みは全部不文律です。ケルトにおいてもエーゲ海においても、「言挙げせず」なのです。論理の世界にもすばらしい精神文明が生まれたということをもち

ろん肯定しながら、言挙げしない一つの文化伝統があり、特に現在の地球の現状を考えるときは、こういうものこそ見直さなければならないのではないかというのが、私の考えであります。

（編集者注：本稿は、平成二十二年一月二十三日に開催された、モラロジー研究所道徳科学研究センター主催の「モラロジー研究会記念講演」の内容を収録したものである。）